

地理教育の場への自然地域名「奥羽山脈」の定着過程

—地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(3)—

米 地 文 夫*

(1993年10月15日受理)

はじめに

「奥羽山脈」は日本の代表的な山脈とみなされ、地理教育上、最も基本的で重要な自然地域名とされている山脈である。しかし、実はこの山脈は日本の主要山脈の中で最も命名が遅れたものの一つであり、近代日本の地理教育の黎明期においては殆ど無名のめだたない山地であったことを、この報告で明らかにしてみたい。

また、奥羽山脈は他の主要な山脈・山地、特に中央日本のそれらに比較すれば、高度はさほど高くないが、連続して長い点で日本でも代表的な山脈とされ、小学生を対象とするクイズの問題に「日本で最も長い山脈はどこか?」「答:奥羽山脈」などがあるほどである。しかし、その連続性がよく知られている「奥羽山脈」が、実はいくつもの部分に分かれ断続しているのである。

これらの点は日本の地理教育と自然地域名称との関係の特性の一面を示すものではないかと考えて、教科書等における表記・記述の分析を試みた。なかでも、「奥羽山脈」の名の定着化の過程の解明は、日本人の独自の山地・山脈観と日本の地理教育などにおける非国際的な定義の仕方などを、浮き彫りにするものと筆者は考えている。

一般的に言えば、自然地域名の問題は特に地理教育の現場で種々の混乱や困難をもたらしている。筆者は前々報(米地1991)および前報(米地1993a)において、その例として「北上平野(もしくは盆地等)」および「北上山地(もしくは高地等)」とをとりあげ、多角的な検討を試みた。すなわち地名の教育の問題と自然地理教育の問題との重合した「地理教育用語としての自然地域名称」のもつ問題点を具体例を通じて考察しようとしたものであったが、今回は、前二報でとりあげた例に比して問題が少なく、完全に定着しているものとみられている自然地域名称の例として「奥羽山脈」をとりあげ、その定着過程を考察するとともに、その定着した自然地域名称にも内包される前掲のような問題点があることを併せて検討する。

地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題は、これまで一般論か現場の実践例の紹介などとして論じられることが多かった。しかし、筆者は個々の自然地域名称を取り上げ具体的に問題点を考察することが必要と考えており、本稿もその試みの一つである。

* 岩手大学教育学部

1 自然地域名「奥羽山脈」の現状

(1) 自然地域名「奥羽山脈」の定着度

岩手大学教育学部の学生 15 人（うち 13 人が 3 年次，他に 2 年次と 4 年次の学生が混入）に，岩手県の略図を示し，その西縁および東半を占める二つの自然地域（すなわち奥羽山脈および北上山地）の名称を尋ねた。対象学生のうち，地理研究室に所属するものは三分の一，また出身地は北海道（道南）1 名，青森県（東部）2 名，岩手県 10 名，宮城県 2 名で，1991 年 10 月 21 日「自然地理学特講」の講義中にアンケートの形で他の問いとともに答えてもらった。結果は次の通りである。

奥羽山脈の正答者：14 名¹⁾

北上山地の正答者：11 名

その後も多少質問の形式を変えて，何度か同種の調査を行ったが，奥羽山脈については，ほぼ 100% に近い正答率であったのに対し，北上山地（または高地等）については，61 名中 38 名などという場合もあり，おおむね 60% 前後の正答率にとどまった。

一方，東北地方については，あまり関心や知識の少ないと思われる九州地方の大学生にも，日本の他の地域の山地・山脈の名称とともに奥羽山脈の名も聞いてみた。対象は福岡大学の文系学生で，筆者の自然地理学の受講生に，1993 年 9 月 14 日，主要山地・山脈を示した白地図上で 7 つの山地・山地の名を答えさせた。他地方出身者を除いた九州地方出身者は計 155 人で，結果は次の通りであった。

山地・山脈名	正解者数(人)	正解率(%)
日高山脈	29	18.7
北上山地	14	9.0
奥羽山脈	88	56.5
飛驒山脈	47	30.3
紀伊山地	74	47.7
中国山地	120	77.4
九州山地	65	41.3

驚くべきことには，地元の九州山地よりも，奥羽山脈の名が知られており，中国地方の中心を占めてわかりやすく，九州にも近い中国山地が第一位であるのは当然としても，奥羽山脈はこれに次ぐ正解者数を示した。7 つのなかでは最も正解率の低かった北上山地とは対照的に，奥羽山脈はきわめて知名度が高いのである。

さて，一般の人々は，小・中学校の地理教育において学習すべき基本的地名をどのようなものと考えているのであろうか。このことについて，日本地理学会地理教育検討委員会が，全国の市民 200 名にアンケートしたことがある。その結果（岩本・吉田 1992）のうち，日本の山脈と山地についてのみ抜き出して，学習すべきとした回答者の数をみると，次のようになる。

日高山脈：142名
 奥羽山脈：155名
 関東山地：106名
 飛騨山脈：155名
 木曾山脈：150名
 赤石山脈：112名
 鈴鹿山脈：118名
 中国山地：150名
 四国山地：153名

すなわち、アンケートで質問の対象とした9つの山脈・山地のうち、奥羽山脈は飛騨山脈と並んで、最も多くの「必要である」との回答があり、この山脈名の重要性が広く認められていることを示している。

以上の各種調査の結果から、奥羽山脈の名はよく知られており、また、その教育上の重要性も認識されていることがわかるのである。

(2) 現在の地理教育における「山脈」の定義と「奥羽山脈」

現在の地理教育における日本の自然地域名称の定義の基本は、建設省地理調査所（現国土地理院）が1954年に専門の研究者や関係官庁等の意見を徴して定めた「主要自然地域名称図」である。この図は、自然地域名称を統一しようという意図で作られたもので、1958年に文部省が発表し、翌年刊行（文部省1959）の「地名の呼び方と書き方《社会科手びき書》」もほぼ、これに従ったものであった。（しかし、文部省がこの「主要自然地域名称図」の内容には従わず、手直した部分があった。たとえば「高地」を採用しなかったこと、三国山脈を使用したことなどであるが、のち「主要自然地域名称図」に合わせるように変更している。）

「主要自然地域名称図」では次のような定義をしている。

- | | |
|----|---|
| 山地 | 地殻の突起部をいい、総括的な意味をもつものとする。 |
| 山脈 | とくに顕著な脈状をなす山地をいう。 |
| 高地 | 起伏はさほど大きくないが、谷の発達が発著であり、表面のおしなべて平坦な山地を、とくに高地の称でよぶ。地勢の上では山地と高原との中間的形態のものをいい、人文的には居住の中心が谷底にある地域をいう。 |
| 高原 | 平坦な表面をもち、比較的小起伏で、谷の発達があまり顕著でなく、表面にまで相当の居住が営まれている山地をいう。 |

教科書研究センター（1978）は、日本の自然地域名称の書き方の指針として、山脈については上記の定義を掲げ、その例として、奥羽、越後、赤石の三つの山脈を挙げている。すなわち、「とくに顕著な脈状をなす山地をいう」という定義に、まさに適合するのが奥羽山脈ということになる。しかし、東北地方の他の山脈ないし山系と呼ばれたものは、西南端の越後山脈以外は、山地と呼ばれることになった。逆にいえば、いかにも山脈らしい山脈以外は、山脈と呼ばれなくなったのである。

このことを、この自然地域名称の策定に携わった中心的地理学者の一人である山口恵一郎(1974)は次のように述べている。

脈状とは山の集まりの状態が列をなしているということである。山脈という呼び名は、山のかさなり、峰のつらなりなど、いわゆる山並み(起伏の様子から「波」を当てることが多い)を想起させるのに適しており、古くから好んで使用されていたものである。しかし、山脈を一つのまとまりをもった地域としてみると、その列状の配置が系列を示すものとはかぎらず、慣用されて来たのも、学術的調査の進んだ今日では、地勢的特徴を表現するのに必ずしも適切ではなくなったので、地域の種類を示すこれらの名称をそれぞれの内容と適合させるようにしたものである。

この文の後半は分かりにくい表現であるが、慣用によって「列状の配置が系列を示すもの」以外のものも山脈とされてきたが、これを学術的視点から排除したということらしい。さらに続けて山口(1974)はこう述べている。

その結果、山脈のつく名称は比較的少くなり、これまで一つの地域に対して、山脈・山地などの名称が併用されていたのを、いずれか一本にしぼったものといえる。

ここには明らかな論理の飛躍がある。前の文の文脈からは、山脈・山地などの名称が併用され得るものと、山脈の名は用いられないものとの、二種類になるはずであり、どういう文脈から、併用を止め、一本にしぼるということが導かれたのであろうか。このような曖昧な論拠で定められたものが一人歩きして、唯一の正しい呼称を定めたものと解されるという融通のきかない結果になったことに対しては、疑問を抱かざるを得ない。

山口(1974)の文はさらにこう続く。

かように、山脈の称は山地のなかの限られた、つまりは山が配列をなして並んでいると認められるものだけに使われる(例 飛驒山脈・奥羽山脈)。こうした性質をもつ山脈は、交通的に隔絶性が強く、人文的な閉鎖性をつくるので、地域画定の際の明確な単位としての意義が高い。したがって、その拡りや高さの大きなものが山脈と呼ばれる率が高いが、本質的には大きさや高さには関係がなく、比較的拡りの小さいものでも山脈とよばれるものがある(たとえば鈴鹿山脈)。反対に、大きなものでも山の並び方が明瞭な列状を示さないとみられるものは、これを山脈とは称しない(たとえば中国山地・紀伊山地・四国山地・九州山地)。

このような「山脈」の定義は、世界の山脈を考慮したものではなく、したがって後述するように問題の多い定義である。

さらに、列状の形態の明瞭なものを「山脈」とし、それ以外を「山地」や「高地」としたため、一般に、山脈の方が重要で、山地がそれほどではないような印象を与えがちなことは、前述の一般の人々への、どの用語が地理教育で必要かというアンケートで、奥羽山脈や飛驒山脈が中国山地や四国山地よりも上位を占め、鈴鹿山脈や日高山脈よりも関東山地が下位になって

いることから推定できる。

しかし、実は現在山地あるいは高地と呼ばれているものの方が、先に命名され、地学的には重要と目されていたのである。これについては、次章で詳述する。

いずれにせよ、この「主要自然地域名称図」が強い規範的な性格をもったことには、多くの問題があると筆者は考えている。

2 自然地域名「奥羽山脈」の変遷過程

(1) 「奥羽山脈」に固有名詞のなかった時期

—1888(明治21)年以前—

自然地域名「奥羽山脈」は、よく知られ、また「北上山脈→北上山地→北上高地」あるいは「出羽山脈→出羽丘陵→出羽山地」などのような変遷にともなう混乱もほとんど無かったと考えられがちであり、最も古くから普及・定着したもののようになっている。

しかし、筆者は自然地域名「奥羽山脈」にも、固有名詞が付されるまでに、かなりの時間がかかり、さらにその名が「奥羽山脈」として定着するに至るまでには、若干の変遷がみられることを、見いだした。

海外の山脈に自然地域名がつけられていることは、すでに幕末の日本でも知られていたが、国内の山脈に名称を与えることとなったのは、明治時代になってからである。

しかし、明治の初頭には、まだ固有名詞はついていなかった。もちろん、そればかりでなく、普通名詞としての山系、山脈、山地等が使用されるようになってからも、まだ時間はあまり経っていなかった。明治も半ばになってからでも、富士谷(1893)が『地文学講義』において次のように書いていることから、それは明らかである。彼は「山岳」「連山」「山系」の三者について説明し、次のように書き加えている。

日本ニハ嘗テスル名稱ヲ用キタルコトナシ、即チ譯語ナレトモ其實物ハ日本ニ於テモ見ルコトヲ得、山ヲ論スルニハ此三個ニ分ツヲ便利ナリトス

江戸時代後期、訳語としての山脈という語が、少なくとも1845(弘化2)年刊行の箕作省吾の「坤輿図識」および翌1846(弘化3)年刊行の「坤輿図識補」にさかのぼることは、筆者(米地1993b)が確かめている。しかし、この山脈も含め、山の集合したものを呼ぶ普通名詞が一般に使用され始めるようになったのは、明治以降であり、日本のそれに対する固有名詞が命名されるのは、おおむね明治も20年代に入ってからである。

例えば、1874(明治7)年文部省刊行の地理教科書である師範学校編輯『日本地誌略』の陸中国の項には、栗駒山(「箕川岳」と須川岳の名を付している)を「羽後ノ境ナル山脈中ノ最高峰ナリ」と書いている。(岩手山をより低いとみたのか、山脈から外れたものとしたのかは分からない)

1877(明治10)年刊行の大槻修二編の『日本地誌要略』(青山紅樹書楼)では、

全国ノ山脈ハ、北隅ノ千島連島ヨリ起リテ、蝦夷島ハ、摩周・阿寒・十勝・石狩・夕張ノ諸岳、並ビ連リテ、正西ニ折レテ、恵山ニ盡ク、松前海峽ヲ隔テ、其脈ヲ恐山ニ列ヌ、甲田山・其南ニ

峙チテ、本島ノ背梁ニ亘ル大山脈ヲ起シ、奥羽ノ中央ハ、岩鷲山・酢川岳・刈田岳・吾妻山等、其大ナル者ナリ。

とあり、同書の東山道の項にも「大山脈」とはあるが、固有名詞はない。

1880(明治13)年文部省刊行の南摩綱紀編『小学地誌』にもやはり固有名詞はみあたらない。

1883(明治16)年刊行の若林虎三郎編『地理小学』(琴山楼)には、奥羽の項に次のような記述がある。

中山道ヨリ来ル山脈、阿武隈川及ビ猪苗代湖ノ間ヲ過ギ蜿蜒北ニ走りテ恐山ニ至ル而シテ中間ニ数多ノ支脈ヲ枝出シテ諸大河ノ分界ヲ為セリ

とある。「諸大河ノ分界ヲ為セリ」という表現が興味深いものであることは、後に論ずる。

1887(明治20)年の地質要報に掲載された西山正吾の「吾妻山四近地質報文」には、蔵王山脈と飯豊山脈の二つについて次のような記載がある。

(蔵王山脈については)

是レ本邦東北部中央山脈ノ一部ニシテ東、太平洋ト西、日本海ニ注ク所ノ諸水ノ分水界ナリ

(飯豊山脈については)是レ中央山脈ト殆ト直角ヲ為セル支脈ニシテ南、日橋川ニ注ク所ノ諸水ト北、松川及ヒ荒川ニ入ル所ノ諸水ノ分水界ヲ為シ…

1888(明治21)年の地質要報に掲載された原田豊吉の「日本地質構造論」には、次の記述がある。

…関東以北ナル本州ニ於テハ二隆起線ヲナス其東ニアルモノハ太平洋及日本海ノ分水線ヲナスト雖モ隆起スルコト其西ナルモノニ劣リ低卑ニシテ著シキ連山ヲナス…

とあり、後段は恐らく主に南端部の知識から全体像を推定して述べたものであろう。

1888(明治21)年刊行の那珂通世・秋山四郎編『日本地理小誌』(中央堂)には、

本島の北のはしより西南の方へ、大なる山脈長くつらなれり、この山脈、本島の中ほどの最せまき所にいたりて、二つにわかれ、一つは南におもむき、一つは西のはしまでつらなれり

この山脈より、あまたの川々流れいづ。その南東の川は、太平洋に流れいり、西北の川は日本海にいり、西南の川は、瀬戸内の海、大坂の入海、または紀の海に在る。太平洋に在る川の大なるものは、北上川、阿武隈川、利根川…(以下略)

とあって、本島すなわち本州島の分水嶺としての大山脈を想定している。

このように、1888(明治21)年までは、本州を貫く、ないしは北海道から続く、大山脈として認識されており、いわば本州山脈ないしは日本山脈とでも称すべきものがイメージされていたが、固有名詞がなかった時期²⁾といえる。この時期は、世界の地理について国をあげて懸命に学んだ時代ともいえるが、世界の大山脈との比較でいえば、このようなスケールでの認識のさ

れ方には妥当な一面がある。

(2) 「奥羽山脈」に多様な固有名詞の付された時期

—1889(明治22)年～1909(明治42)年—

現段階では、現「奥羽山脈」に初めて固有名詞が付された事例を特定するには至っていないが、筆者の知る範囲では、最も早いものの一つが、農商務省地質局が1889(明治22)年に刊行した『大日本帝国地産要覧図』である。(この注目すべき地図帳については、稿を改め他の機会に紹介する予定である。)

この中の「山系水脈」図には、「奥羽山脈」にあたる山脈に「分水山脈」の語が当てられ、英語で“Watershed Range”と添記されているのである。(図1)その他、注目すべきことの一つは、この分水山脈は関東以西には連続せず、その間に帝釈山脈や三国山脈などが位置すること、さらに「北上山系」“Kitakami Mountains”や「阿武隈山系」“Abukuma Mountains”, さらに「出羽山脈」“Dewa Range”などが表示されていることも重要である。

明治新政府は、国内の資源開発や産業の振興に資するための基礎資料の整備に努めてきたが、その長い調査によりやく一応の目処がたったのが、この時期といえるであろう。国内に関する、より精緻な地理学的情報の整備の結果が、この地図帳であり、それは、世界地理とはスケールを異にする、日本地理の教育内容を作り上げてゆく機縁ともなるのである。

この地図帳は1889(明治22)年10月の刊行であるが、実はこれよりも早く、同年2月に、矢津昌永著『日本地文学』(丸善)が刊行されており、現「奥羽山脈」にあたる山脈に固有名詞が与えられている。しかしながら、この書で矢津は「北上山脈」や「阿武隈山脈」など火山を伴わないものについては、そのまま「山脈」とし、火山を伴うものを矢津は「火山質山脈」と呼び、奥羽山脈にあたるものを「東部中央火山脈」と呼んでいるので、厳密に言えば、山脈としての命名ではないといえる。また出羽山脈ないし出羽山地は「東部沿岸火山脈」とした。(のちに地理教育の場では、山脈と火山脈とを違うものとし、「奥羽山脈に沿い那須火山脈が通る」などとし、さらに火山脈は不適切で火山帯とすべきである、などの意見を入れられ、現在では火山脈の語は死語となっている。)

さきの『大日本帝国地産要覧図』の中に示された「分水山脈」の語は、1893(明治26)年刊行の山上万次郎編『新撰地文学』(富山房)に用いられた。すなわち現奥羽山脈について、山上はこう記している。

北日本ノ内帯山脈ニシテ、本洲(ママ)東北部ノ中央ヲ南走シ、磐城、岩代、下野ノ国境ヨリ、山勢西折シテ、上信越ノ境界ニ連リ、南北彎ノ結合地ニ会合スルモノ、コレナリ。此山脈ハ、東北諸水ノ分水界ヲ成スヲ以テ、コレヲ分水山脈ト称ス

すなわち、帝釈山脈や三国山脈なども含めて「分水山脈」と呼んでおり、その点では『大日本帝国地産要覧図』よりも、若干後退した感がある。

1900(明治33)年刊行の、同じく山上万次郎著の『近世地文学教科書』(富山房)においては、「中央分水山脈」の名で扱われている。この場合も、現奥羽山脈から現木曾山脈に至る長大な山脈としている。

『日本地文学』、『新撰地文学』、『近世地文学教科書』はいずれも中等学校用の教科書である

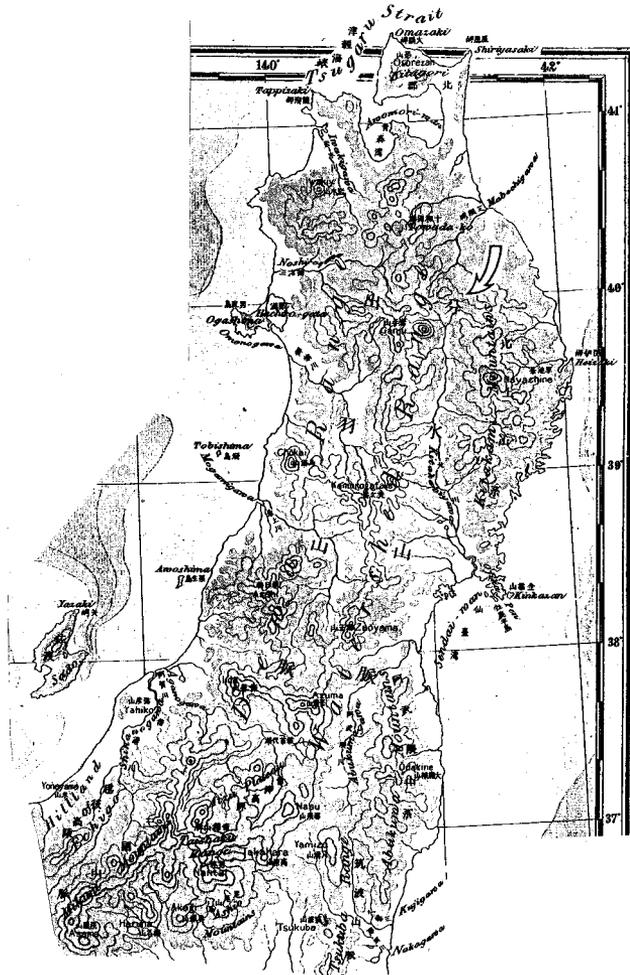


図1.『大日本帝国地産図』(1889)のなかの「分水山脈」
 白抜き矢印(米地記入)は分水山脈の名の位置を示す。
 「山系水脈図」の北東隅の部分。原図は30万分の1の縮
 尺で基図は黒、山地はセピア色、海は青色の段彩。

が、小学校の教科書ではどうなっていたであろうか。

「奥羽山脈」の語がみられるものに、1892(明治25)年刊行の学海指針社編『日本地理初歩』(集英堂)がある。その奥羽地方の項には、次のような記述がある。

奥羽山脈中央ニ亘リ、羽越山脈、陸奥ノ西方ヨリ、両羽ノ国中ニ亘リテ越後ニ至ル、阿武隈山脈ハ磐城ニ、北上山脈ハ陸中ニアリ、

これが「奥羽山脈」の最も早い用例の一つである。この教科書の場合、奥羽山脈と同様に、二国に跨がる山脈に、その両国から一字ずつを採った「羽越山脈」もあることが注目される。

1893(明治26)年刊行の金港堂編輯所編の『小学校用日本地理』では、奥羽山脈にあたるものを「陸奥山脈」と呼んで次のように記している。

奥羽ニハ三大山脈アリ、陸奥山脈ハ陸奥ノ北端ヨリ起コリ、中央国境ヲ南下スル山脈ニシテ、八甲田山、十和田山、岩手山、駒ガ岳、蔵王山、荊田山、吾妻山、磐梯山等ノ高山アリ。出羽山脈ハ陸奥山脈ト并行シ、羽前、羽後ヲ南下スル山脈ニシテ、脈中ノ月山、朝日岳、飯豊山、燧岳等、最高シ。北上山脈ハ北上川ノ東岸ニ在リテ、早池峰、最高ク、阿武隈山脈ハ阿武隈川ノ東岸ニ在リテ、東海道ノ常陸ニ亘レリ。

この時点では、東北中西部の二つの山脈の呼称については、

A, 奥羽山脈—羽越山脈

B, 陸奥山脈—出羽山脈

という二種類のセットがあったわけである。

小学校地理教育の場で、明確に東北地方を三列の山脈が走るものとし、それぞれに固有名詞を与えたものとして、その後の教科書の記述の原型となったものといえるが、同時期あるいはやや後れて出版された教科書には、まだ類例は少ないようである。例えば、1898(明治31)年刊行の文学社編輯所編『修正新訂地誌』や1900(明治33)年刊行の普及会編輯所編『小学地理』などでは、山脈名は記されていない。明治36年には、第一期国定教科書として文部省による『小学地理』が刊行されるが、これまた山脈についての記載はない。

すなわち、1889(明治22)年から1909(明治42)年までの間には、奥羽山脈に当たるものに、多様な命名がなされ、その一つとして「奥羽山脈」の名も登場するが、まだ一般化せず、教科書によっては、山脈について固有名詞を付けないのみならず、ほとんど触れないものもあるなど、いわば混乱期であったといえよう。

(3) 「奥羽山脈」という呼称への統一と定着の時期

—1910(明治43)年以降—

1910(明治43)年、第二期国定教科書の一冊として、文部省から『尋常小学地理』が刊行されるが、この教科書が「奥羽山脈」という呼称への統一と定着の始まりとなった。すなわち、奥羽地方の箇所には次の記述がある。

此の地方には中央を南北に走れる山脈あり。是即ち奥羽山脈にして、磐梯山・岩手山等の火山其の中に聳ゆ。此の山脈の東方に並びて南に阿武隈山脈、北に北上山脈の互れるあり。奥羽山脈との間に細長き平野を挟み、阿武隈・北上の二川其の中を流る。

このあと、西方の山脈についても記述があるが、山脈名は記していない。

1914(大正7)年の第三期国定教科書『尋常小学地理書』(文部省)にも、この奥羽山脈の名が踏襲され、三列の山脈がそれらの固有名詞をあげて説明されている。

奥羽地方には南北にわたれる三列の山脈あり。中央にあるを奥羽山脈といひ、中に関東地方よりのび来れる那須火山脈通じて、磐梯山・岩手山等火山そびゆ。

西にあるを出羽丘陵及び越後山脈といふ。是等にも亦一火山脈通じて、岩木山、鳥海山、月山等の之に属するものあり。

東部にある山脈は仙台平野によりて南・北に分たれ、北にあるのを北上山脈といひ、南にあるのを阿武隈山脈といふ。いずれも其の高さ大ならず。

奥羽山脈は日本海方面と太平洋方面との分水嶺にして、東西両列の山脈との間に細長き平野をはさむ。

かくして、引き続き「奥羽山脈」の名が用いられたのみならず、三列の山脈があることを述べ、それらの固有名詞も示し、奥羽山脈が分水嶺であることを説き、戦前の地理教育における奥羽山脈など東北地方の山脈に関する基本的な叙述の形式・内容が完成している。

一般に、「奥羽山脈」の名が定着し、その重要性も確実に認識されていった時期は、したがって、ほぼ大正時代であったということができよう。そのことは1925(大正14)年刊行の理科年表第一冊の中の「本邦ノ主要ナ山脈ト其秀峰」という表に、北上、阿武隈、出羽などの山脈とともに、奥羽山脈が載っていることでもわかる。³⁾

1935(昭和10)年の第四期国定教科書『尋常小学地理書』(文部省)も、1938(昭和13)年の第五期国定教科書『尋常小学地理書』(文部省)も、ほとんど変化はない。後者の記述は、次の通りである。

奥羽地方には南北に長い山脈が三列に並んでいる。これらの山脈の間には東に長い平地をはさみ、西にいくつもの盆地をはさんでゐる。

中央にある山脈は奥羽山脈で、その中には那須火山脈が縦に通つてゐる。那須火山脈には磐梯山・岩手山等のあまたの高い火山がそびえてゐる。奥羽山脈はこれらの高い山と共に奥羽地方の大分水嶺となっている。なほこの山脈中には猪苗代湖・十和田湖等の著名な湖がある。

以下、北上・阿武隈と、出羽・越後という東西の両山脈列の記述が続く。

ここまでの、「奥羽山脈」の名や記述の変遷過程で興味深いのは、次の諸点であろう。

- ① 「奥羽」山脈の名は、北上、阿武隈、出羽などの山脈(山地)名より新しいこと
- ② 分水嶺であることが、強調されてきたこと
- ③ 奥羽地方という呼び名とセットにして用いられてきたこと
- ④ 三つの山脈列の中央という位置付けであったこと
- ⑤ 国定教科書によって、呼び名とその性格とが定着したこと

(4) 自然地域用語としての「山系」・「山脈」・「山地」の変遷

このように、「奥羽山脈」の場合の固有名詞部分、すなわち後年「奥羽」として定着する部分の変遷についてみてみると、他方、いわゆる総称詞(楢村1985)部分である「山脈」は、はじめから現在まで変化がなかったことと対照的であることがわかる。

北上山地の場合は、北上山系→北上山脈→北上山地→北上高地という変遷をしており、出羽

山地も、出羽山脈→出羽丘陵→出羽山地と変化し、奥羽山脈と並ぶ日本の代表的な山脈である飛驒山脈も飛驒山系→飛驒山脈と変わっている。なぜ奥羽山脈の総称詞部分に変化が無かったかは、逆に、自然地域用語としての「山系」・「山脈」・「山地」の意味や役割の変遷をみることによって、明らかになるであろう。

筆者(米地 1993 b)は、「山脈」という用語が、江戸時代において、すでに世界の地理書を翻訳、編集する際に用いられていることを指摘した。「山脈」は東アジアの伝統的な地勢観や日本人の感性と合う用語であった。

しかし、お雇い外国人にとっては、もっと即物的な感覚の「山系」が妥当と考えられたようである。西洋の近代地質学の成果である地体構造的な考えに基づく山々の連続性を示す用語を、東洋の古来の風水論的な考えと結び付く「脈」などという語を使う「山脈」とすることに抵抗があったのではないだろうか。ナウマンの Gebirge および Bergland が「山系」と訳されたのには、そのような科学的配慮があったと思われる。

ナウマンが論じた Gebirge および Bergland が「山系」として、地学関係者の間で用いられていたことは、原田(1888)が次のように書いていることで明白である。

頃日本邦地学士社会ニテ専ラナウマン氏ノ前例ニヨリ普通用ユル所ノ名称ヲ挙クレハ左ノ如シ
北上山系 阿武隈山系 関東山系 三国山系 赤石山系

原田(1888)は、ナウマンの命名した5つの山系に加えて、新たに飛驒山脈や木曾山脈、さらに中国山系などの重要な自然地域名称を設けた。彼は少なくとも18の山脈および山地名を設定したが、その名のうち葛城、千曲、道坂、鳥ノ子、仏頂など、その後ほとんど使用されなかったものも多い。しかも山脈と山系との両方を混用しており、基準は明確でない。

農商務省地質局(1889)の『大日本帝国地産要覧図』は、はじめて日本全国の主要な山脈や山地に、もれなく自然地域名称を付そうとしたものである。この中の山系水脈図では、北上山系、阿武隈山系、関東山系、飛驒山系、木曾山系、赤石山系、紀伊山系、中国山系、四国山系、南部九州山系、というように、形成が古く、当時地学者の最大関心事であった日本列島の基盤の構造を論ずる際に重要なものに山系の名が与えられている。これに対して山脈という語は、どちらかといえば、「その他」というべきものに付されたといえなくもない。

「山系」という用語は、「東北日本の地体構造は樺太山系に、西南日本のそれは支那山系に、それぞれ連続する」というような記述の場合にも使われ、日本列島の地学的性格を論ずる際に、不可欠な用語であった。

しかし、地理教育の場では、むしろ「山脈」のもつ視覚的なイメージと、多義性などが重視されて、ほとんど「山脈」一種のみが用いられる状況が第二次大戦まで続いていたのである。

地理調査所による「自然地域名称図」の登場は、この「山脈」という用語のもつ視覚的なイメージ、すなわち、平野から見た山並みの景観からの連想や、様々な形態やスケールのものを包括する多義性などを否定するものであった。「とくに顕著な脈状をなす」山地という狭い定義を山脈に与えることは、残りの山地を「山地」もしくは「高地」として、いわば従たる位置に置くことになったのである。

このような経過を簡潔にまとめると、次のようになる。

江戸時代：一部で「山脈」が用いられる

明治前中期：地学領域で、主として「山系」が用いられる

(時に従として「山脈」も用いられる)

明治後期～第二次大戦直後まで：地理教育の場で「山脈」が用いられる

1954年以降：「山脈」に該当するものは限定され、他は「山地」や「高地」と呼ばれる

このように、自然地域用語としての「山系」・「山脈」・「山地」の意味や役割の変遷を辿ってみると、奥羽山脈は、はじめ山系には該当しない従たるものとして山脈と呼ばれ、のちに限定された概念の山脈の代表的なものとして、そのまま山脈と呼ばれたことがわかるのである。

3 自然地域名「奥羽山脈」の特性

(1) 「山脈」としての「奥羽山脈」の特異性

奥羽山脈は、細長く脈状に続き、分水界をなす、などの性格から、日本における最も代表的、典型的な「山脈」の一つと、一般にはみられている。

しかし、日本の「山脈」のなかで、奥羽山脈はむしろ例外的な性格のものであったとみるべきであろうと筆者は考えている。日本の山脈など山地については、大局的には次のように分類できよう。

Aグループ：大陸プレート衝突による隆起山脈

飛驒山脈、木曾山脈、赤石山脈、日高山脈

最も大きな高度を呈し、急峻である。

Bグループ：大陸プレート縁辺の隆起帯の山地

紀伊山地、四国山地、九州山地

幅広く急峻である。

Cグループ：隆起準平原等が破断された断層地塊

鈴鹿山脈、養老山地、生駒山地など

小型であるが、その割りに急峻である。

Dグループ：隆起準平原的性格を有する山地

北上山地、阿武隈山地、中国山地

幅広く、部分的に高原状を呈する。

Eグループ：グリーンタフ地域の隆起帯の山地

奥羽山脈、出羽山地

火山を除けば比較的低く、断続しつつ長い。

これらの5グループの中で、明治時代に、ナウマンや原田らに注目されたのが、A～Dであり、Eグループについては、原田(1888)が奥羽山脈について「低卑ニシテ著シキ連山ヲナサス…」と述べたように、山脈としての形態が不明瞭なものとして、固有名詞も付けられていなかったのである。

前述の農商務省地質局(1889)『大日本帝国地産要覧図』の「山系水脈」図において、「奥羽

山脈」にあたる山脈に「分水山脈」の語を与えているのは、西山（1887）が彼のいう蔵王山脈について「是レ本邦東北部中央山脈ノ一部ニシテ東、太平洋ト西、日本海ニ注ク所ノ諸水ノ分水界ナリ」と記し、原田（1888）が、現在の奥羽山脈に当たるものを「太平洋及日本海ノ分水線ヲナス」と書いたことなどに拠ったものであろう。なお、このユニークな「分水山脈」の名は、オーストラリア東部の Great Dividing Mountains に類する命名であるが、英訳を“Water-shed Range”とした点からみて、直接まねたものではなさそうである。

ヨーロッパの山地を良く知るナウマンや原田にとっては、奥羽山脈のような、それほどの高度もなく、幅に広がりがなく、「著シキ連山」をなしていないものは、明瞭な山系ないし山脈と認め難かったのであろうし、ヨーロッパにはみられないタイプであるグリーンタフ造山運動による山地には、あまり注目しなかったのもあろう。

『大日本帝国地産要覧図』の中の「山系水脈」図の中の山系と山脈の英語表記をみると、その多くは mountains であり、高度のある飛騨、木曾、赤石、広がりのある北上、阿武隈、紀伊、中国、四国、九州南部などが含まれる。

これに対して、range の付されたものは、新たに命名された、高度のあまり高くない分水（奥羽）、出羽、などや、鈴鹿、和泉、讃岐などの小規模なものなどが多く、第一級の山地・山脈よりなる mountains に対して、range は二級の山地・山脈とみられていたことを示すといえよう。

世界の大山脈は、その多くが mountains と呼ばれ、range と称するものは少数である。

「山系水脈」図の中の山系は 11 総てが mountains で、山脈のうち、3 つが mountains、他の 13 が range という英語表記も、この時点における「山系～mountains 系用語」の、「山脈～range 系用語」に対する優位を反映している。

しかし、その後、日本人の感性や、日本の複雑な地形構造は、地理教育の場での「山脈」という用語の普及定着を進めていき、山脈以外の呼称は地学系の論文などにおける特別な用例にほぼ限られるようになっていったのである。そして、さらに 1954 年以降は、「山脈」を中心に、その基準に合わないものを「山地」「高地」とするということになった。

この経過のなかで、いわば評価の逆転が起こったわけであり、その結果、かつては注目に値いしなかった奥羽山脈が、逆に山脈の代表として扱われるようになり、山脈・山地のうち、地理教育上、最も重要な地名として認識されるに至ったのである。

では、なぜ、高さや広がりよりも、脈状に長く続くことが重要な基準となったのであろうか。国際的には、ほとんど他に例のない、きわめて日本的な、この 1954 年地理調査所定義の因って来た所以を解く鍵は、奥羽山脈の名の変遷過程に見いだせるのである。

奥羽山脈にあたる山地にまず与えられた名は、分水山脈であった。この「分水山脈」の命名された時点では、一般の山脈は、必ずしも分水嶺ではないものとして考えられていたはずである。それ故に、現奥羽山脈に当たる山脈は、分水嶺である特徴にちなんで、「分水山脈」と命名されたのである。筆者（1993b）は、山脈という語は、中国における竜脈の概念を取り入れたもので、海や平野の下も潜って、断続するものであり、一続きの形をとるとは限らないことを指摘した。分水山脈と同時に命名された出羽山脈（現出羽山地）は、米代、雄物、最上などの河川に分断され、分水嶺になってはいないが、それでも山脈と言えたのである。

では、なぜ分水嶺であることが、特徴的なこととして注目されたのであろうか。水田耕作を基幹とする日本農業は、河川にその用水のほとんどを依存している。したがって、人々は分水嶺に極めて強い関心を寄せてきた。分水嶺の両側に水分（みくまり）という地名があり、神社

がある、などという事例も、それを裏付ける。

現奥羽山脈においても、藩政時代に分水嶺を越えて、太平洋斜面の仙台伊達領から、日本海斜面の上山領へ導水する横川堰があったし、明治時代になってからは、その逆に日本海斜面の猪苗代湖から太平洋斜面に通水する安積疎水が建設された。奥羽山脈にあたる山脈が分水界になっていることは、地理的な特徴として重視され、その後の地理教育では欠かせない知識として学習されることになる。

山々の集合する地域・山地のなかで、山脈を竜脈的な「断続ないし連続する山々の列」としてではなく、分水嶺として「連続する山々の列」という弁別特徴をもつものとする、という考えかたが、次第に地理関係者のなかに育っていったと考えられる。

その到達点が、1954年地理調査所定義である。「山脈」を「とくに顕著な脈状をなす山地をいう」としたこの定義は、分水界とはなっていない出羽山地などを排除したのみならず、分水界が複雑に屈曲する北上山地や中国山地なども山脈とは呼ばないこととしたのである。

このような定義が国際的には通用しないことは、ヒマラヤをはじめ、アトラス、カスケード、クンルン、大シンアンリンなど、世界の著名な「山脈」のいくつものが、この日本的な「山脈」の定義には当てはめ難いことからわかる。

「奥羽」という固有名詞部分が、定着するまでにかなりの時間がかかっていることは、前述の通りである。この固有名詞部分は、日本の山脈・山地名としては例外に属する。旧国名を冠した山脈・山地名には、出羽、越後、飛騨、和泉、紀伊、讃岐など例は多い。ところが「奥羽山脈」という名は、陸奥と出羽との両国から一字ずつとった例外的なものである。⁴⁾ 両国の境界に沿っているという点では一見妥当のようにみえるが、和泉と紀伊の境界をなしていても和泉山脈、讃岐と阿波の境界であっても讃岐山脈というように、本来は一国名を用いるのが通例であった。一例ではあるが、陸奥山脈と呼ばれたことがあるのも、そのような通例に従った命名であった。

「奥羽」という命名は、むしろ奥羽地方の中心をなすという性格から名付けられたものとみるべきであろう。その点では、中国山地、四国山地、九州山地など同様のタイプといえる。現在では、奥羽地方という用語はほとんど用いられず、東北地方と呼ばれているが、第二次大戦以前の地理教育では、奥羽地方の中央を走る分水界としての奥羽山脈として、いわば学習のポイントとなる明快な用語であった。

現在でも、しばしば「奥羽脊梁山脈」と呼ばれるが、これは「奥羽山脈」という名の「脊梁」ということではなく、「奥羽地方」の「脊梁」をなす山脈という意味で用いられていることが多い。

(2) 「奥羽山脈」の断続性と雁行性

このように「奥羽山脈」は、その命名の経過からみても、地形地質の側面からは、必ずしも重視されていなかったといえよう。奥羽山脈は、日本最長の山脈と称されることがある。しかし、厳密には、断続する幾つもの山脈からなり、かつそれらが雁行する。筆者がかつて行った区分(1984 ab, 1989)を一部改訂して次に示す。(図2)

I 奥羽山脈北部地域

I a 八甲田～十和田火山群

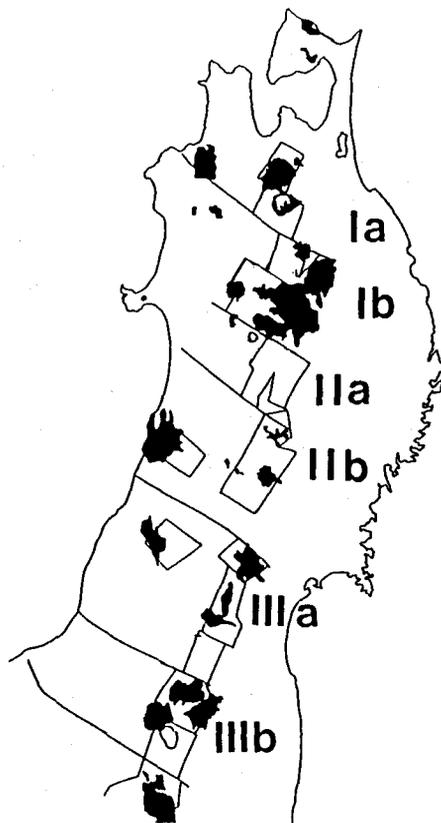


図2. 構造線により断続する奥羽山脈
記号は本文参照のこと。黒つぶしの部分は火山。
向山ほか(1983)の原図に、米地(1984)が記号を挿入したものを一部改変。

- I b 八幡平～岩手火山群
- II 奥羽山脈中部地域
 - II a 和賀岳～真昼岳連山
 - II b 焼石岳～栗駒山(須川岳)連山
- III 奥羽山脈南部地域
 - III a 船形山～蔵王山連山
 - III b 吾妻山～安達太良山連山

従来の用例に従うと、さらにこれに加えて

- IV 奥羽山脈最南端地域
 - IV a 那須火山群

とすべきであろう。しかし、筆者は、むしろ帝釈山脈の名を復活させて、その東端に那須火山群を含めるのが妥当であろうと考えている。

このような分断された形は、当然、その部分を横切る交通路が開かれることになる。また分断箇所以外にも低い鞍部が多く、したがって、奥羽山脈ほど鉄道や道路が数多く横断している山脈は珍しい。鉄道の路線をみると、花輪線、田沢湖線、北上線、陸羽東線、仙山線、奥羽本線、磐越西線、のあわせて7本の路線が山脈を横断している。

さらに、断続する各部分が雁行しており、のみならず奥羽山脈をこのように分断してみると、このうち、奥羽山脈中部地域が、実は並走する二本の山脈からなることがわかる。このことについて、かつて筆者（1984 b）は次のように記した。

この奥羽山脈中部地域をさらに細かくみると、東側の焼石岳―栗駒山連山と西側の和賀岳―真昼岳連山とにわかれる。すなわち、奥羽山脈は東西二列の山脈が平行して走っているのである。東側の焼石岳と栗駒山とは新期火山であり、西側の和賀岳から真昼岳へ続く連山は非火山で、東西両側に断層崖（秋田側：千屋断層、岩手側：川舟断層）にはさまれた地壘山地である。この並走する二列の山地は、南へのびると東の山地は鬼首付近の火山性の噴出岩が多い地域に続き、西の山地は皆瀬川付近でやや不明瞭になるが、神室山地で再び明瞭な山岳地域となる。

その後、松本（1987）も同様の事象に気づき、西の和賀岳の方の山脈を筆者の奥羽山脈北部地域に結び付けて「北奥羽山脈」とし、東の焼石岳の方の山脈を筆者の奥羽山脈南部地域と結び付けて「南奥羽山脈」とも呼ぶべきもの、とした。

奥羽山脈は、松本のように南北に二分するよりも、筆者の先の考え方のように、大きくは三つ、細かくは六つに切るほうが妥当であると考え。もし、この二列になっている点に留意して二分するならば、筆者はむしろ、北は八幡平～岩手火山群まで、南は先の筆者の記述のように神室山地まで視野に入れて「東奥羽山脈」と「西奥羽山脈」とする方が、よいと考える。この場合、「東奥羽山脈」の北端は七時雨山、南端は安達太良山になり、「西奥羽山脈」は北端は八甲田火山、南端は神室山地となる。（図3）その両山脈の間に、雫石盆地、沢内盆地、向町盆地などが挟まれるのである。

いずれにもせよ、奥羽山脈は、単なる「顕著な脈状をなす山地」ではなく、実は南北にも東西にも複雑に分断された形をしているといえる。したがって、奥羽山脈の場合、山口（1974）のいう、山が配列をなして並んで、交通的に隔絶性が強く、人文的な閉鎖性をつくる、といった性格は、他の「山脈」よりも希薄で、地理調査所1954年定義を採っても、「山脈」の代表的なものとは言い難いのである。

この点からみても1954年地理調査所名称・定義・代表例などを再検討すべきであると考えられる。

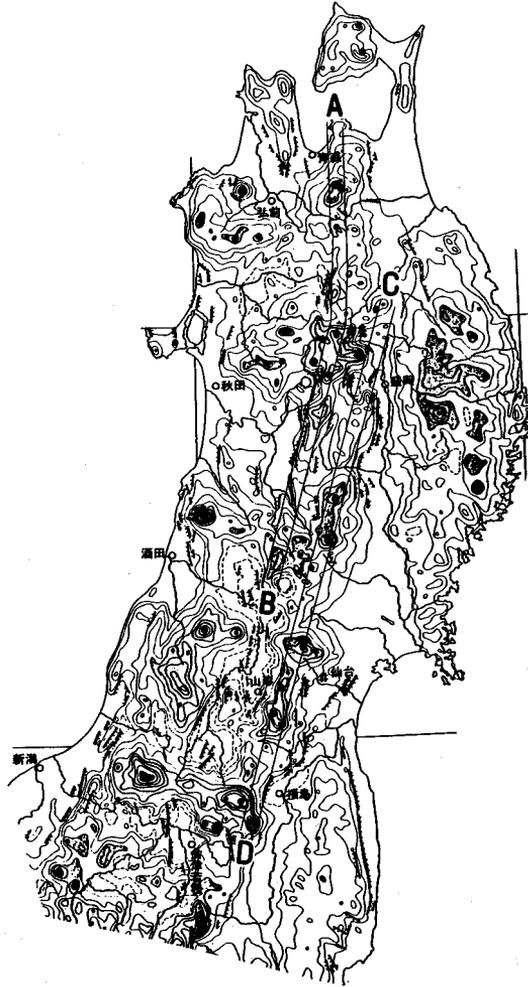


図3：二列に分かれる奥羽山脈

A=B：西奥羽山脈，C=D：東奥羽山脈。

活断層研究会（1981）の原図（活断層等の分布図，なお接峰面等高線は200m間隔）に，米地が上の二つの山脈を記入した。

おわりに

「分水山脈」の語から「奥羽山脈」に至る山脈の名の変遷に，日本における自然地域名の認識に関する変遷がみられる。明治の半ばまでは，世界の大山脈のようなスケールでの認識があり，地質構造に重点を置いた見方が為されていた。その段階では「奥羽山脈」は，特に固有名詞を付して命名されることもないほどの，目立たない山脈であった。

明治中期以降は分水界であることに注目した「分水山脈」の語が用いられ，ついで奥羽地方の中央線という位置に注目した「奥羽山脈」が登場する。奥羽山脈が完全に定着するのは，第

二期国定教科書からで、第二次大戦後に「奥羽地方」の名がほとんど用いられなくなってからも、1954年地理調査所定義による「とくに顕著な脈状をなす」という定義にあう典型的な例として、「奥羽山脈」は、日本の代表的な山脈とみなされるようになった。

しかし、実際には、奥羽山脈は高度もあまり高くなく、断続しており、一本の脈状の形態ではない。ところが、地理教育の立場からは、概してパターン化、単純化が図られてきたため、誇張された観念的な奥羽山脈像が形成され、そのイメージがひとり歩きしてきたといえよう。

この経過をみると、日本の自然地域名称が国際性に欠けていることに気がつく。すなわち、海外の例として英語表記をあげれば、mountainsが一般的で、rangeの付く自然地域が例外的であるのに対して、日本では逆にrangeに相当する山脈が典型的なものとなされ、その他の、いわば基準外のものをmountainsに相当する山地としたのである。

また、人文地理的な視点を重視し、自然地理的な立場からの十分な検討なしに名称や地域的範囲が考えられてきたという傾向もみられる。

日本の自然地域名称は、少なくとも明治後期以降は、ほとんど地理教育の立場からの観点からみられることとなり、それが、このような人文地理的な意味付けを加えた定義をすることとなったものと考えられる。

自然地域の人文地理的な面での役割を教えること自体は、重要なことであり、地理教育の大切なテーマの一つでもある。しかしながら、それにのみ偏ることには問題が多い。自然地域名称の中には、そのような偏りによって、国際的に通用しないものがみられることを、筆者は前報、前々報で論じた。

地理教育の場合へ自然地域名称「奥羽山脈」が定着していった過程をみると、「山脈」という総称詞部分に対しては日本人独特の感情がこめられてゆき、「奥羽」という固有名詞部分には奥羽（東北）地方全体との関係が強く意識されていった、ということが明らかになった。「奥羽山脈」が自然地域の名称ではあるものの、純粋に自然地理的に扱われてきたというよりは、むしろ、より広い意味づけをも含めた「地理教育のための地名」となっていったのである。このことは、反面、世界の同種自然地域名称との間に定義や認識のズレが生ずる結果となっている。

「奥羽山脈」のような、いわば優等生的にみえ、問題が無さそうな自然地域名称についてすら、その変遷過程を辿ってみると、内包された問題が多いことがわかるのである。日本の自然地域名称については、1954年地理調査所名称および定義を、特に自然地理学の立場から再検討すべき時期にきているのではあるまいか。

《本稿は、1992年6月の岩手大学教育学部学会37回研究発表会における発表内容（本研究年報53巻1号所収）の補足として、その後得られた知見をまとめたものである。》

《注》

- 1) 奥羽山脈についての唯一の誤答者であった学生は、質問の意味を取り違え、個々の山名を答えたもので、奥羽山脈であることは承知していた。（この学生は北上山地についても同様の誤りをしている。）北上山地と答えたものの中には北上高地、北上高原、北上山脈などと答えたものも含む
- 2) この時期の最後の年、1888（明治21）年には、磐梯山の噴火があるが、この噴火を報じた当時の新聞、雑誌等には、この山が（奥羽山脈というような）固有名詞をもつ山脈に属していることを記しているものは、管見によれば見当たらない。

- 3) 奥羽山脈の秀峰としては和賀岳が挙げられているが、火山以外の山として選ばれたものらしい。
- 4) 奥羽山脈に類する二国から一字ずつとっての命名は、地理調査所(1959)の主要自然地域名称図では、他に房総丘陵と筑肥山地がある程度である。このうち、前者は房総半島の丘陵であり、後者は、他の山地に筑紫山地の名がつけられていたことなどの理由による例外的な命名と思われる。

追記：注1)を付した本文に続く部分に注記もしくは本文として記述すべきデータが本稿脱稿後得られたので、追記する。九州地域出身学生に対して行った山脈・山地名の調査とほぼ同様に、山地・山脈を示した白地図上で7つの山地・山地の名を答えさせるアンケートを、1993年10月14日、岩手大学教育学部の講義「自然地理学」受講者に対して行った。そのうち東北地方出身者は、ちょうど50名で(岩手県内31名、県外19名)、結果は次の通りであった。

山地・山脈名	正解者数(人)	正解率(%)
日高山脈	23	46.0
北上山地	36	72.0
奥羽山脈	45	90.0
飛驒山脈	19	38.0
紀伊山地	26	52.0
中国山地	34	68.0
九州山地	19	38.0

九州地域の学生と比較して、奥羽山脈の認識が、当然のことながら極めて高く、間違っただけの場合も、名前は理解していながら白地図の読み方のミスで位置を取り違えたものが多かった。九州地域の学生の場合と比較すると、多くの興味ある問題が他にもあるが、ここでは、奥羽山脈への理解度の高さの指摘のみにとどめておき、その分析と考察は次の機会に譲りたい。

《文献》

- 富士谷孝雄(1893)：『地文学講義』。232。成美堂。
- 原田豊吉(1888)：「日本地質構造論」。地質要報。明治21年—4。309—387。
- 岩本広実・吉田和義(1992)：『地理教育における基本的地名の選定に関する研究—アンケート調査報告—』60。新踏社。
- 活断層研究会編(1981)：『日本の活断層—分布図と資料』。374。東大出版会。
- 教科書研究センター編(1978)：『地名表記の手引』。276。ぎょうせい。
- 建設省国土地理院(1981)：『標準地名集(自然地名)増補改定版』。247。同院。
- 松本秀明(1987)：「二列に分かれている奥羽山脈」。中沢・駒井編『岩手の不思議—なぜ? どうして?』岩手日報社。122—123。
- 松尾俊郎編(1959)：『地名の研究—社会科教授資料—』。210。大阪教育図書。大阪。
- 文部省(1959)：『地名の呼び方と書き方《社会科手びき書》』。157。大阪教育図書。大阪。
- 梶村大彬(1985)：『自然地理用語からみた世界の地理名称 上巻』。440。古今書院。
- 梶村大彬(1986)：『自然地理用語からみた世界の地理名称 下巻』。462。古今書院。

- 向山・中村・井上・木村 (1983) : 「東北日本におけるブロック運動と鮮新世以降の火山活動」, 火山2集, 28, 395-408.
- 西山正吾 (1887) : 「吾妻山四近地質報文」, 地質要報, 明治20年-1, 39-112.
- 農商務省地質局 (1889) : 『大日本帝国地産要覧図』, 農商務省地質局.
- 山上万次郎編 (1893) : 『新撰地文学』, 262, 富山房.
- 山上万次郎 (1899) : 『近世地文学教科書』, 128, 富山房.
- 山口恵一郎 (1955) : 「日本主要自然地域の名称の設定」, 地学雑誌, 64, 11-18.
- 山口恵一郎 (1974) : 『地図と地名』, 286, 古今書院.
- 山口恵一郎 (1984) : 『地名の論理』, 236, そしえて.
- 矢津昌永 (1889) : 『日本地文学』, 475, 丸善.
- 米地文夫 (1984 a) : 「山形-仙台関係論序説」, 地域経済研究会年報, 18, 1-7.
- 米地文夫 (1984 b) : 「地域特性と福祉との関係」, 山形県高齢化社会研究所紀要, 3-1, 88-95.
- 米地文夫 (1989) : 「御所山 (船形火山) の地形景観」, 山形県総合学術調査会, 『御所山』, 330-338.
- 米地文夫 (1991) : 「自然地域名『北上盆地』と『北上平野』-地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(1)-」, 岩手大学教育学部研究年報, 51, 105-118.
- 米地文夫 (1993 a) : 「『北上山地』の呼称に関するターミノロジー-地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題(2)-」, 岩手大学教育学部研究年報, 53, 167-182.
- 米地文夫 (1993 b) : 「地理教育用語としての『山脈』と日常語としての『山脈』-『竜脈』から『青い山脈』まで-」, 季刊地理学, 45, 167-170.

付記

この研究にあたり, 以上のほか, 多くの教科書, 地図帳, 辞典類, 地域区分関係論文などを参照したが, 煩瑣に過ぎるため, 省略した。教科書のうち主たるものについては, 前報 (1993 a) 文末のリストを参照されたい。